

「ステファノの殉教と教会への迫害」

2024年01月26日

都の外に引きずり出して石を投げつけた。証人たちは、自分の上着を脱いで、サウロという若者の足元に置いた。人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。そして、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。こう言って、ステファノは眠りに就いた。サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。（使徒7：58～8：1a）

その日、エルサレムの教会に対して激しい迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った。（使徒8：1b）

ステファノは最高法院で堂々と証言した。神は人の手で造ったものにはお住みにならない。また、あなたがたこそ割礼を受けていない人たちで、聖霊に逆らっている。あなたがたの先祖が迫害しなかった預言者は一人もいない。そして今や、正しいイエスを裏切り、殺す者となった。天使たちを通して律法を受けた者なのに、それを守っていない、と。

これを聞いた人々は激しく怒り、ステファノに向かい歯ぎしりした。ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられる主イエスを見て、「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのがみえる」と言った。人々は、聞くに堪えぬと耳を覆い、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、エルサレムの外に引きずり出して、石を投げた。レビ記に、「主の名をそしる者は必ず死ななければならない。会衆全体が必ずその者を石で打ち殺さなければならない。イスラエル人であれ、寄留者あれ、御名をそしる者は死ななければならない（レビ24：16）」と、神への冒瀆罪は石打ち刑と定めている。ステファノの説教は神への冒瀆と受け取られ、石打ち刑を当然としたのである。

人々が石を投げつけている間、ステファノは神に呼びかけて「主イエスよ、私の霊をお受けください」と祈った。ルカ福音書は、十字架の上で主イエスが「父よ、私の霊を御手に委ねます（23：46）」と祈られたと記している。ステファノはひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と祈って、眠りについた。ルカ福音書は、主イエスは自分を殺す者のために「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか分からないのです（23：34b）」と祈られたと記している。著者ルカは、ステファノの殉教を主イエスの十字架の死に重ね合わせている。この時、証人たちは自分の上着を脱いで、サウロという若者の足元に置いた。サウロはステファノの殺害に賛成していた。サウロは、後のキリスト教最大の伝道者パウロである。サウロはステファノの殉教に責任者として、立ち合っていたが、ステファノの「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」という殺す者をも赦す祈りは、彼の心に深く突き刺さり、内心、揺り動かされたのではないか。パウロは、主イエスの十字架による罪人の「赦し」を福音の核心として宣教している。

ステファノの説教と殉教は、民衆から好意を持たれていたエルサレム教会の見方を一変させ、ユダヤ教に反対する危険な群れと映った。教会に対する激しい迫害が起こった。使徒たちの他は皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った。教会が受けた最初の迫害である。ところが、散って行った所で、信者たちは主イエスの福音を宣べ伝えたのである。

ステファノの殉教死を悼み、教会の信仰篤い人々は丁重に葬った。しかし、サウロは教会を荒らし、家々に押し入り、男女を問わず、引き出して、牢に送った。熱心なユダヤ教徒だったサウロは、十字架で死んだ主イエス信じる信仰を許せなかったのである。